



## 里見恵子先生の急逝を悼む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉武, 信二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15751">http://hdl.handle.net/10466/15751</a>

## 里見恵子先生の急逝を悼む

人間社会システム科学研究科 社会福祉学専攻長

吉 武 信 二

2017年5月23日、午前9時53分、本専攻准教授の里見恵子先生が享年64歳で急逝されました。数年前からやや体調を崩されることがあるとはお聞きしていたものの、今年の春先には「薬の副作用で体調が悪い日もあるけど、本人は意外と元気です。」と笑顔で私たちに話されていました。今となっては私たちに余計な心配や気遣いをさせまいと、気丈に振る舞っておられたのかもしれませんが。そのようなご様子から、来年度末に控えた定年まで私たちの近くで元気にご活躍される姿しか想像していなかった私にとっては、まさに突然の訃報でした。これまでお世話になったお礼もきちんとできないまま、お別れしなければならなかったことは非常に無念であり、もっといろいろな事をお話しさせて頂いたり、教えて頂く機会を持てれば良かったと悔いながら、今はただご冥福をお祈りするばかりです。そして、大変僣越ながら、専攻長として追悼の辞を述べさせていただきます。

里見恵子先生は北海道のご出身で、北海道教育大学言語障害児教育教員養成課程修了後、北海道白老町立白老小学校にことばの教諭として就任。その後、米国コロラド大学インリアル・セミナーに参加され、同研究領域について探求。大阪教育大学研究生修了後、大阪市更生療育センターでの言語療法士としての勤務を経て、1996年に大阪府立大学社会福祉学部講師に就任。2002年から現職で長きにわたり教育研究に多大な貢献をされてきました。

研究の専門領域は、乳児保育、障がい児保育、言語コミュニケーション障がい学を主軸とされ、障がいのある児童・生徒への言語・コミュニケーション支援に携わってこられました。なかでも、言語やコミュニケーションに障がいがある子どもたちとどのように関わるかという研究および実践を行う日本INREAL（インリアル）研究会を立ち上げ、事務局長に就任。発達障がい児やダウン症児、またその親に対して定期的、長期的支援に取り組んでおられたのは、私どもが直接先生のご活躍の様子を肌で感じられたものでした。

また、主な著書に「ダウン症児の学びとコミュニケーション支援ガイド」「図説LD児の言語・コミュニケーション障害の理解と指導」「保育における特別支援」「実践インリアルアプローチ事例集」「図説LD児の言語・コミュニケーション障害の理解と指導」「ダウン症児者の社会生活」などがあり、日本LD学会副理事長などを歴任。当該研究分野では文字どおり第一人者という存在でした。

さらに、学生教育にも精力的に取り組まれ、数多くの教え子たちが各方面で活躍。里見先生と同じ志を持って、大学教員となっている人や、本研究誌に投稿している人もおられます。

しかし、個人的なことで恐縮ながら、私にとっての里見先生は、遠くて手の届かない偉大な研究者というよりも、身近で気さくに話しかけて下さる同じ職場のやさしい先輩でした。2011年、現在の学域・学類制の組織になったときに私は他の部署から転籍してきたのですが、初対面から親しげに話しかけて下さいました。おいしそうなコーヒーの香りが漂う研究室を訪れると、「今ちょうどコーヒーがはいるから、よかったら飲んで〜。」と誘って下さり、よくごちそうになりました。重要書類を一緒に印刷したとき、ミスプリント箇所を発見できないまま配布してしまったことに落ちこんでいた私を責めるでもなく、「何で私も気づかなかったのかな〜。悔しいね〜。」と言って、慰めて下さいました。あと、里見先生の授業を直接受ける機会はなかったのですが、オープンキャンパスで受験生に向けたミニ講義を聴く機会があり、そのやさしい語り口に引き込まれた記憶が

あります。発達障害について専門外の私でもすごく興味を引く内容で、私が司会者の役割を忘れて思わず聴き入ってしまったことを話すと、「私、プレゼンは得意なんです。ウフフ、なんてね…。」とちょっとおどけた様子で返してくれました。12月になると、いつも里見研究室の前には大きなクリスマスツリーが飾られるのですが、「これ（インリアル研究会に参加している）子どもたちが喜ぶのよ～」と私に話してくれた様子など、やさしさあふれる表情ばかりが思い出されます。

研究者としても、実践者としても、また一人の人間としても、みんなに尊敬され、頼られ、慕われ、そして愛された里見先生。その存在を失った損失と悲しみは、計り知れないほど大きいことに改めて気づかされます。今なお翻弄を隠しきれない状況ではありますが、里見先生の意志を継ぐ私たち後輩や数多くの教え子たちの活躍や思いの強さが、少しずつこの大きな穴を埋めていってくれるのではないか…。そのように肝に銘じ、私たちは進んで行くべきだと考えています。どうかこれからは高いところから、今までと同じやさしいまなざしで私たち後輩や教え子たちの活躍をお見守り下さい。

改めて、心よりご冥福をお祈りいたします。